

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈5月17日（金）放送分〉

テーマ「奄美群島12市町村の伝説・昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今年度は、毎月第3金曜日に、奄美の伝説や昔話などを紹介する「奄美群島12市町村」シリーズをお届けします。

第2回目は奄美市住用町の昔話「イシャラダラホ」です。

昔、イシャラダラホという豪傑^{ごうけつ}がいたそう。山間^{やんま}の近くの長浜^{ながはま}というところに、網打ち^{あみうち}にいったが、まだ潮が満ちていないので、潮が満ちてくるまでと、木の根を枕に寝ていた。イシャラダラホの妻は妊娠^{にんしん}して臨月^{りんげつ}になっていた。

イシャラダラホがぐっすり寝ていたら、そこへケンムンがきて、「これ、これ、起きてみよ。お前の妻は今、子どもを生んだので、その子の運命を定める矢の『いゃんはじ』を自分がさしてきたよ」といったそう。

昔は子どもが生まれるとすぐ、「この子の、『いゃんはじ』は、私がさす」といって、棒でも何でも、屋根裏^{やねうら}に張りつけた板にクワンと投げるものであった。

それでイシャラダラホは、「何と『いゃんはじ』をさしてきたか」というと、ケンムンは、

「お前の子は女の子だった。すばらしい美人になって、十八になったら東仲間^{ひがしなかま えんづ}に縁付きがある。その日の朝は晴天^{せいてん}だが、十二時から先は大雨になる。その時、娘は折れかかった立ち枯れ木の下に雨宿り^{あめやど}をし、その時にその木が倒れてきて、押し殺される。という『いゃんはじ』をさしてきた」というので、イシャラダラホは、「本当にそんな『いゃんはじ』をさしたのか」とケンムンに返答をして、家に帰ってきてみると、ケンムンのいうとおりに妻が女の子を産んであった。

イシャラダラホは、心の中で「悪い『いゃんはじ』をさされたものだ…」と思ったが、そのことを誰にも言わないようにしていた。そして、娘が十八の時に本当に東仲間^{えんだん}から縁談があり、娘を縁談相手にあげることにした。

娘が嫁入り^{よめい}する日、出発の時には本当に上天^{じょうてんき}気だったのに、途中で雨風^{あめかぜ}が強くなり、

娘と一緒に歩いていた送り人^{ひと}などのところを抜けて、雨宿りをするために大木^{たいぼく}の下に駆けだした。イシャラダラホも一緒に行って雨宿りをしていると、大木がガラガラと折れてきたので、娘をつかんで投げたら、娘は倒れてきた木の下敷きにはならず助かった。

イシャラダラホは、

「はあーやーれやれ、今日、ケンムンの『いゃんはじ』をはずしたので、これで本当に私の子どもになった。これからはもう皆さん方にお任せしますから、娘がしあわせに暮らせるようにしてください」と娘をとつがせてやったという。

さて、みなさんは「運命」について感じるのでしょうか。

先ほどのお話では、ケンムンに定められてしまった娘の恐ろしい運命を、父であるイシャラダラホが最後に変えて、娘を幸せに導きました。

このようなお話は、「運^{うん}定め^{さだ}話^{ばなし}」といわれ、世界中に見られるようです。また、ドラマや映画、漫画やアニメの世界でも、過酷な運命に逆らう主人公が、最後に幸せや栄光をつかむというパターンは多いですね。

さらに、先ほどのお話では、奄美の昔話によく登場する「ケンムン」が出てきました。「ケンムン」については、奄美の「ケンムン^{はかせ}博士^{えばらよしもり}」である恵原義盛氏の研究が有名です。恵原義盛氏については、奄美図書館2階の郷土コーナーに著書や展示物もありますので、ぜひ一度ご覧ください。

奄美図書館には、みなさまとの「運命の出会い」を待っている本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。